



南国病院外観。現在の建屋は1978年に鉄筋コンクリート造り5階（一部6階）建て建設されたもので、現在162床が稼働中である。建築から40年以上が経過していることから、同院では10年後を目途に建て替えを検討しているという。

OVER STORY 2025 高知県 医療法人つくし会 南国病院

電子カルテが不得手とする精神科領域の 特有ニーズに十全に応えるシステムが誕生― 多職種間連携、業務効率化に大きな成果出す

高知県南国市にある南国病院は、1969年の設立以来、半世紀以上にわたって高品質な精神科医療を提供してきたが、2000年以降は更に脳神経内科、消化器内科を加え、地域の専門病院として同地の地域医療に貢献してきている。精神科では難しいと言われるIT化にも積極的に挑んできており、既に2006年にはオーダーリングシステムを導入している。2013年には電子カルテシステムを導入したが、本年、当該システムの“新型”に更新し、精神科診療の質を大きく高めた。医師、看護師、そして精神保健福祉士など、多職種連携を容易にし、かつ煩雑な同科特有の文書作成にも対応している。この新しい電子カルテシステムの導入の経緯と有用性を、理事長／院長の中澤氏、事務部長の中川氏らに聞いてみた。

医療法人つくし会南国病院
理事長 院長

中澤 宏之氏に聞く

― 貴院の沿革と概要からお聞きします。

私の父である中澤誠一郎が1969（昭和44）年に80床の精神科単科病院として開設したのが当院の嚆矢となります。当時の精神科医療は、閉鎖的で偏見も伴っていました。そのような社会的な評価に違和感を持った父が、開放的で地域に開かれた精神科医療を実践したいと考え、開院したと聞いています。

私は2000年に当院に着任したのですが、私の専門の脳神経内科を標榜科目に加えました。その後、バランスの取れた診療を提供するために消化器内科、内科、リハビリテーション科も加えて、地域医療に貢献することを目指しています。

― 入院患者の傾向や診療の特徴をお聞かせください。

精神科では、老年期精神障害、いわゆる認知症が最も多いです。以前は統合失調症やうつ病が多かったのですが、高齢社会の進展に伴い、老年期精神障害の患者数が逆転しています。また、脳神経内科では、主に神経変性疾患という脳の難病であるパーキンソン病やALS、脊髄小脳変性症、多系統萎縮症などの患者さんの治療が中心になっています。神経難病の分野でも、高齢化の進展でこのような疾患に罹患する患者さんが多くなっており、当院が地域医療に最も貢献している領域と感じています。

また、当院では患者さんの社会復帰支

援や、在宅復帰、施設への入所などに力を入れていことから、ソーシャルワーカーを始めとする多職種が連携した診療を行っているっており、その点も高く評価されていると自負するところです。

現在、特殊疾患病棟の病床稼働率は95%以上です。また、精神一般病床では稼働率を維持するのが難しいのですが、それでも約90%の病床稼働率となっています。

― 2025年に電子カルテシステムを更新したと伺いました。

2006年にオーダーリングシステムとして「MALL（パシフィックメディカル）」を導入、2013年には、電子カルテシステム「MALL3」を導入し、2025年には、その発展形である「MALL4」に更新しました。

「MALL」は、オーダーリングシステムの導入を検討した当時から、高知県幡多地区で既に実績を挙げていたシステムでしたし、私自身、県の医師会や地域の医師会で役員を務めていることもあり、地元のベンダのシステムを採用したいと望んでいたことから、導入に迷いはありませんでした。現実的には、導入費用が最も重要な問題でしたが、他ベンダのシステムと比較しても、「MALL」のリーズナブルなコスト負担は大きな魅力でした。

― 「MALL4」への更新で、精神科の診療機能が向上されましたか。

精神科における診療では、患者さんの発言をそのまま記録として残さなければいけないこと、精神保健福祉法関連で作成しなければならない公的書類が膨大で多くの時間と手間が必要であることなど、

一般の診療科とは異なる点が多いのが特徴です。

従来システムの「MALL3」では、精神科診療に必要な機能は、外部のアプリケーションやソフトウェアを併用し、その記録を電子カルテシステム上に転記していたのですが、「MALL4」ではこれらの機能が電子カルテシステムに内蔵されており、簡便かつ二元的に患者記録を管理することができるようになりました。また、「MALL4」は、1つの文書を作成するだけで、患者のプロフィールやその記載内容を他の書類・文書とも共有でき、それらの作成が容易になったことで大いに助かっています。さらに、これらの情報は主治医だけでなく、患者さんに関係する他の職種とも情報共有できるので、診療全体の効率化にも大いに貢献しています。

当院では、先述のとおり多職種協働での取り組みを重視した医療を展開していますが、「MALL4」はまさにこの多職種協働を推進するためのシステムであると歓迎しているところです。

また、精神科では、多職種によるカンファレンスだけでなく、患者さんのご家族や、地域の支援者を含めた小さな集まりによ

るカンファレンスも多く行います。これらの記録用書式も「MALL4」には登録されており、きめ細かい記録環境が整備されていることから、記録の共有や、患者さんのご家族への情報開示に役立てることができる点でも、たいへん有用であると評価しています。

「MALL4」導入から稼働までは、パシフィックメディカルの担当者と念入りに打ち合わせを行い、現場のニーズの詳細を聞き取ってもらい、それらに優先順位をつけ、当院の望む機能を実装してもらえたことにたいへん満足しています。

― 「MALL4」を操作されてのご感想をお聞かせください。

従来の「MALL」の操作感はそのままに新機能を追加したので、違和感なく「MALL4」に移行できたと感じています。

パシフィックメディカルは元々幡多地方の地元企業でしたが、今や全国展開している大企業に成長し、その信頼度も高まっています。また、高知医療介護情報連携システム「高知家@ライン」の運用でも同社のシステムが利用されて各地で高い評価を得ており、当院としても長くお付き合いできたらと考えています。



中澤 宏之（なかざわ・ひろゆき）氏

1965年高知県生まれ。1991年高知医科大学医学部（現・高知大学医学部）卒。同年同大学附属病院神経科精神科研修医。1995年同大学大学院博士課程修了、同年同大学附属病院神経科精神科医員。1996年加国ブリティッシュコロンビア大学精神科 Kinsmen Laboratory of Neurological Research 研究員、1998年高知医科大学医学部附属病院神経科精神科助手、1999年国立療養所東高知病院神経内科医師を経て、2000年医療法人つくし会南国病院神経内科勤務。2007年同病院院長、2015年より医療法人つくし会理事長（院長兼務）。

■医療法人つくし会 南国病院 事務部

高い機能を搭載しつつもリーズナブルな価格が魅力の電子カルテで
精神科医療の独自かつ多様な事務上の課題の解決に取り組む

Interview

医療法人つくし会 南国病院
事務部長

中川 博文氏に聞く



中川 博文 (なかがわ ひろふみ) 氏
情報システム企業に勤務の後、2013
年にシステム担当として南国病院に
入職。2018年より同病院 事務部長、
現在に至る。

南国病院の事務部門には、医事課12名と
総務・経理課4名が所属。このうち、病院
情報システムを担当しているのが、事務部
長の中川博文氏である。同氏が自身の業務
を紹介する。

「病院情報システムは、施設管理担当者が
ハード面を、私がソフト面の管理・運用を
担当しています。元々、私は2013年に
電子カルテシステムが導入された年にシス
テム管理者として入職し、その担当を続け
ながら事務部長になったことから、現在で
もシステム管理を担当しています」

電子カルテシステム「MALL4」
精神科診療に特化した機能を搭載
情報共有等、業務効率化に効果を発揮

『MALL4』の優れた機能を、中川氏はつ
ぎのように評価する。

「精神科の指示項目に、隔離拘束があるの
ですが、指示を入力した際にそれがカルテ

■医療法人つくし会 南国病院 精神科

従来の電子カルテシステムが持つ直感的な操作性等に加えて

精神科にとって重要な書類作成機能の大幅な向上を評価

Interview

医療法人つくし会 南国病院 精神科
医師

石田 青鳥氏に聞く



石田 青鳥 (いしだ・せいちょう) 氏
2010年自治医科大学医学部卒。
高知医療センター、嶺北中央病院、
沖の島診療所、梶原病院、高知大
学医学部附属病院神経精神科、十
和診療所を経て、2019年より南国
病院精神科勤務。

2019年に南国病院 精神科に入職し
た石田青鳥氏は、診療の現況をつぎのよ
うに話してくれる。

「私は1日25人程度の患者さんの外来診
療を行っています。最近が高齢化に伴
い、認知症の患者さんが増えている傾向
があります。その他では、昔ながらの統
合失調症の患者さんが2割ほど、うつ病
などの気分障害が2割、神経症が1割程
度を占めます。若い方に限って言えば、
発達障害と、それが原因でうつ病を発症
する方が多いですね。発達障害は最近話
題になることも多いですが、社会の要求
水準が上がってきたことにより、以前よ
りも診断に結びついてしまっているの
ではと感じています」

石田氏は、電子カルテシステム「M A
L L 4」をつぎのように評価する。
「入職当時の電子カルテシステムは『M A

画面のSOAPに即座に反映される点が良い
ですね。隔離拘束については、精神保健福
祉法に基づき隔離拘束の開始と終了の記載
は厳しくチェックされます。当院でも、医
師はもちろんコメディカルも記載のチェッ
クを行っています。このような指示が自
動で記載されることで、業務負担も軽減で
きるのではないかと想定しています。

また、医療保護入院の入院届など、従来
は別システムで運用していた書類関連デー
タも、電子カルテシステム上で一元管理す
ることが可能になり、さらに、各種書類の
作成・未作成についても電子カルテシステ
ム上でチェックできるので、たいへん楽にな
りました。

それぞれ独自システムで運用していた機
能を、リハビリ以外は全て電子カルテ『M
A L L 4』に二元化しましたので、かつての
独自システムの良さもあったかとは思いま
すが、情報共有や多職種連携などの面につ
いては各段に強化されました」

精神科の書類関係については、入力や
データ管理の方法が変わったので、精神科
医とソーシャルワーカーと病棟看護師で協
議して、より現場で扱いやすいように運用
法を変更。また、精神科以外の検査部門や
薬局、栄養科のシステムも一元管理でき
るようになったので、その運用法についても
事前に打ち合わせをして、より効率的な運
用法へ変更したという。

中川氏は、パシフィッ
クメディカルの対応力
を評価した上で、今後
のシステムへの期待をつ
ぎのように話す。

「パシフィックメディカル
は全国展開しています
が、営業所が地元の南
国市にもあり、トラバ
ル時や当院からの要望
に迅速かつ真摯に対応
してもらえるのがたいへ
ん有り難いですね。

当院は精神科及び慢
性期医療に関する統計
資料の提出が求められ
ることが多いので、そ
の点の効率化を今後の
システムの進展に期待
しています。例えば、

精神科では、毎年6月
30日時点の精神保健医
療福祉の実態を把握す
るための調査である通
称『630調査』とい
うものがあり、『M A L
L 4』を用いてこの調査への対応を容易化
できれば、かなり事務部門の業務負担が軽
減されるのではと考えています。

また、今後はオンライン診療や生成A I
の活用などを踏まえて、これまでインタ
ーネット環境下に対してクローズドだった病
院情報システムを、セキュアな環境の下で
オープン化できないかとも考えています。2
つのネットワークを1つにできれば、利便性

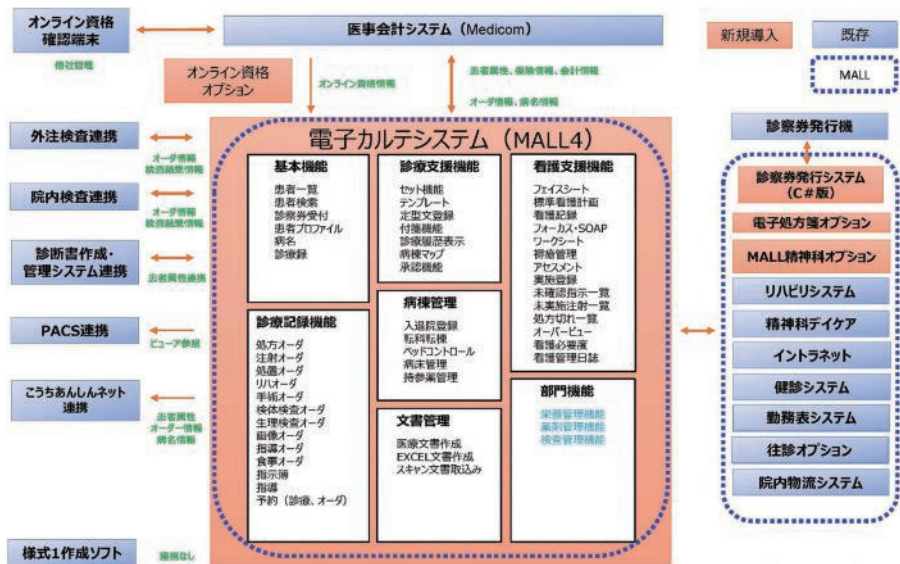
者さんを診察しなければならない医師に
とってはたいへん便利なツールでした。

今回の更新で『M A L L 4』になりま
したが、精神科の医療にとって重要な書
類の作成機能が充実した点は有り難い
ですね。精神科特有の書類作成機能が『M
A L L 4』に備わっていることから、医
療保護入院のお知らせを含め、電子
カルテシステム上でこれらの書類を作成、

印刷まで実行できていま
す。従来は定まった用紙
に書きをしていました
から、業務が大幅に効
率化されましたし、遅滞な
く看護師らスタッフとも
情報共有が容易になりま
した。看護師側からする
と、ある患者さんが入院
されると聞いた際、それ
は任意入院なのか、医療
保護入院なのかの判別
を参照することで容易に
なっています。

また、入院時の患者さ
んの社会的・職業的・心
理的機能を評価するのに
用いられている数値ス
ケールであるG A F 尺度
を一括入力できる点など
も『M A L L 4』に新た
に加わった機能ですが、
現場を良く研究して開
発したことが伺えます。
また、『M A L L 4』

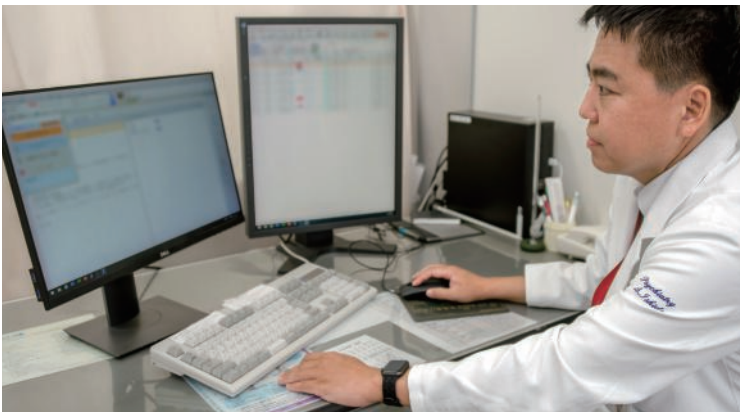
南国病院システム構成図



南国病院の情報システム構成図。レセコンやリハビリを除く、ほとんどの機能を電子カルテシステム「MALL4」が網羅。院内には約150台の端末でシステムを運用。システムは仮想サーバ上で運用されており、システムトラブルは稼働以来発生しておらず、安定した稼働を実現している。

に更新されて以降、ソーシャルワーカー
が用いる、患者さんやそのご家族に対す
るインフォームドコンセントの内容も分
かりやすく記載されるようになっていま
す。それで、患者さんの退院調整がどの
ように進んでいるか、携わっている医療
スタッフから理解しやすくなり、自身の
医療業務が進めやすくなりました。

今後の機能拡張としては、検査スケ
ジュールを組むと自動で定期オーダーさ
れる仕組みや、精神科特有の患者の口述
記録の音声入力化などが実現すれば、よ
り一層、外来業務の効率化が為されるの
ではないでしょうか」



「MALL4」を操作する石田氏。精神科医は皆、タイピング能力が高いと話す石田氏だが「新システムは操作を直感的に行えるので使いやすい」と「MALL4」の機能性と操作性を高く評価している。

■医療法人つくし会 南国病院 看護部

看護現場での業務改善・効率化に対するニーズを汲み上げて
新電子カルテにその対応策を搭載して現場の負担を軽減する

南国病院には、看護部に114名が勤務。そのうち、精神一般病床は看護師・准看護師・看護助手合わせて29名が担当している。病棟師長の大崎浩徳氏がその業務内容と課題を話す。

「精神」一般病床60床のうち、40床が閉鎖病床、20床が開放病床となっています。

精神一般病床には、一般の病床と異なり、認知症の患者さんや統合失調症の患者さんが多く入院されている特殊な環境下にあります。環境を整備し、入院患者さんには安心・安楽に過ごして頂くことが何よ



病棟師長
大崎浩徳 (おおさき・ひろのり)氏



病棟主任
百田波恵 (ももた・なみえ)氏



看護師
小林和香奈 (こばやし・わかな)氏

り重要です。しかし、入院患者さんの大半は高齢でもあることから自身の行動を制御するのが難しいため、看護師が最も気を付けなければならないのは偶発的な事故、例えば転倒などには特に注意を払う必要があります。

最近の患者さんの傾向で言えば、患者さんの高齢化もあって、統合失調症と認知症の両方を発症するような患者さんも多くなってきました。時代と共に看護内容も変化しますので、入院患者さんの身体管理をしながら、どのように看護業務に取り組んでいくのか、試行錯誤を続けているところです」

電子カルテシステム「MAL4」
看護業務における入力の簡便化や
紙ベース運用のデジタル化を実現

「MAL4」更新に伴い、病棟主任の百田波恵氏は業務効率が改善された点を、つぎのように挙げる。

「病棟での夜勤の際、従来、当院では午後10時と午前2時の2回、患者さんの様子を電子カルテに個別に入力しなければなりませんでした。『MAL4』では、新機能として同記録を一括で入力できるようになり、業務効率が各段に向上しました」。

同じく病棟の看護師である小林和香奈氏も、食事内容の変更等、「MAL4」によつて業務改善が図られた点を強調する。「栄養科に、入院患者の食事内容変更を知

■医療法人つくし会 南国病院 地域連携・医療相談室

診療記録ビューアー画面上に統合された患者の診療情報を活用
入院患者の前方支援・後方支援の質の向上を大きく推進する

南国病院における診療の要の1つが地域連携・医療相談室である。同室には、精神保健福祉士が3名所属しており、その1人である井上貴世氏が、同室の運営内容を説明してくれる。

「地域連携・医療相談室では、地域の医療機関や介護施設からの緊急受診・入院相談などの前方支援を看護師が、入院患者さんの退院・転院支援やかかりつけ医の紹介・手配、訪問診療の手配及び介護事業所、介護施設との連携などの後方支援をソーシャルワーカーが担っています。私

たちは精神保健福祉士は前方と後方の双方の支援業務を担当し、精神疾患を抱える患者さんの入院から退院までを、一貫してサポートする役割を担っています」

同じく地域連携・医療相談室の精神保健福祉士である山本真里氏は、一般的な病院の地域連携室との違いを話す。

「一般的な病院と異なり、精神保健福祉法が適用されています。最近では認知症の患者さんが多いですが、10代の頃から統合失調症を患い、社会経験を積むことができなかった患者さんのサポートなども担当します。ご本人がご存じない情報も存在したりしますので、栄養士、リハビリテーションの担当者、作業療法士など、多くの職種のスタッフと連携しながら、多角的に情報を収集して前方・後方支援業務に当たっています」

電子カルテシステム「MAL4」
業務によつて分散されたシステムを統合
情報共有による多職種間連携を促進

「MAL4」について、同室の精神保健福祉士の楠瀬幸氏がその有用性を話す。

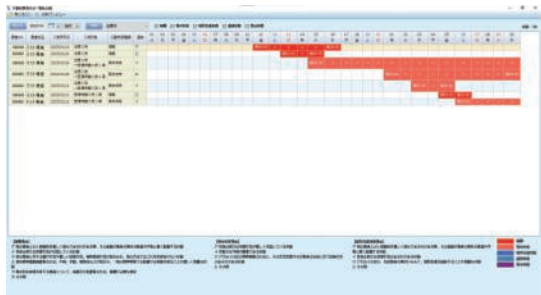
「従来は、別システムでの運用でしたので、私たちが地域連携・医療相談室のスタッフが入力した情報を、改めて医師ら医療スタッフが電子カルテシステムに転記していたのですが、『MAL4』では、私たちが入力した患者さんやそのご家族の情報なども自動的に電子カルテシステムに転記さ

精神科入院時作成必要文書管理



精神科入院時作成必要文書管理画面。一般診療科に比べて作成すべき書類が多い精神科の入院患者に対する多様な文書を電子カルテ画面上で容易に管理・運用することができる。

行動制限指示の一覧性台帳



行動制限指示の一覧性台帳画面。精神科の入院患者に対して重要な身体拘束など、これまで紙ベースで運用していた特殊な処置についても「MAL4」でデジタル的に管理・運用が可能となっている。

らせる際、従来の『MAL3』では、端末上で別に、連絡票、という画面を開き、そこに患者情報や変更点を入力し、栄養科に送信するなど、かなり手間が掛かる作業でした。一方、『MAL4』になってからは、カルテ画面上にある当該患者のオーバービュー画面上にある食事の項目をクリックするだけで変更でき、入力作業が簡略化されたことに加えて内容が見やすくなっていることから、たいへん業務負担が軽減されています。食事の変更は、患者さんの外泊や退院時などに行うことが多く、高い頻度で必要な作業でしたので、この業務の簡略化に対しては看護師一同、満足しています」

大崎氏も「MAL4」の多彩な新機能を評価する。

「すでに『MAL3』の頃から便利さを痛感していたものの、身体拘束など、特別な処置については紙ベースで記録していました。一方、『MAL4』では電子カルテ上に直接記録することができるよう

なり、紙ベースでの記録が減ったこと、オーバービュー画面によつて患者さんのさまざまな診療記録が容易に参照できるようになった点など、さらに便利になりましたね。当院は、入退院の患者数が多いことから病棟看護師の業務量も多いのですが、電子カルテシステムによつてかなり迅速かつ正確に対応することができるようになりました」

「MAL4」稼働前にはパシフィックメディアの担当者と事前に入念な打ち合わせを行い、看護師サイドからシステムへの要望を伝えたことから、多くの業務が改善・効率化されたと大崎氏は話す。

「現場の運用を見てもいいながら、紙ベースの運用のデジタル化や、業務の簡便化をパシフィックの担当者と協議し、多くを實現してもらいました。『MAL4』にはたいへん満足していますし、パシフィックメディアの対応力に感謝しています」

れ、また、他のさまざまな記録にも反映されるので、各職種スタッフの転記の手間が大きく省かれました。その一方で、私たちも、医師を始め患者さんのサポートを行うさまざまなスタッフが入力した診療情報を診療記録ビューアー画面上から参照でき、情報共有という点で極めて有用であると感じています。

また、精神科では膨大な数の文書や提出物があるのはすでに聞いているでしょうが、これらの文書の管理や提出物の催促はこれまで私たちが担当していました。特に、提出物の催促は心理的な負担も大きかったのですが、『MAL4』にはこのような書類等に対するリマインド機能を備えており、私たちが催促しなくてもシステムが自動で医師に通知してくれるので、たいへん有り難いと感じています」

山本氏も、機能の統合を高く評価する。「精神科の書類は特殊な内容のものが多く、従来は電子カルテシステムの機能として組み込めておらず、電子カルテシス

テム以外のアプリやソフトに頼る面が大きかったです。しかし『MAL4』には、それらの機能が組み込まれたことにより、私たちの業務でも電子カルテから多くの診療情報を診療記録ビューアーを参照することで容易に得られるようになりました。例えば患者さんの退院に向けた書類作成などの業務が容易になり、とても満足しています」

井上氏も、診療記録ビューアー機能でさまざまな診療情報を参照できることが、医療連携室の業務に大きく貢献していると話す。

「当院の入院患者さんに対する外部施設やケアマネージャーからの問い合わせにも、より詳細な内容をお伝えできるので、具体的な相談もしやすくなり、業務の質が上がったことを実感しています。

『MAL4』に脳神経内科に関連する同様の機能も追加してくれると、より当院の診療の質向上につながるのではないで

しょうか」

医療法人つくし会 南国病院



医療法人社団つくし会の在宅医療支援センター

精神一般病床60床、特殊疾患病床102床の計162床を有する精神科・脳神経内科を中心とする病院で、主なスタッフは、常勤医10名、看護師他の職員は非常勤含め200名。地元医療機関や介護施設等と連携を推進する地域連携・医療相談室には看護師1名、精神保健福祉士3名、社会福祉士1名が所属する。

同院では、臨床だけでなく、中澤理事長が地元の高知大学出身であることから、大学医局と連携する他、大学の関連病院、臨床研修の協力病院として、また、学会の教育施設として、学術的、教育的な役割も担う。

所在地：高知県南国市大埴甲1479-3
許可病床数：162床(精神一般病床：60床、
特殊疾患病床：102床)
理事長／院長：中澤宏之